

詩人予言者 Cowper の信仰と愛

園部治夫

序

人間の生み出した偉大な詩人たちが天来の光明を授かり、＜世界の血潮を豊かにする＞ほどの詩歌を作り出す靈感を与えられ、燃え立つような言葉を生み出すに至ったことに対して、我々は神に深甚の謝意を表さなければならない。詩人という語は作成者を意味するもので、それは想像力で思想と感情の新世界を創造する者のことである。また Shakespeare の言葉を引用すれば、その目が＜地から天をちらりと見、天から地をちらりと見る＞者である。

Doth glance from heaven to heaven, from earth to heaven:

And as imagination bodies forth

The forms of things unknown, the poet's pen

Turns them to shapes, and gives to airy nothings

A local habitation and a name. (注1)

真の詩人といわれる＜身の廻りに名詩選集という花飾りを着けた＞ものは全て、我々の恩恵者であるが、それはいくつかの種類に分けることが出来る。例えば幾多の不滅の貢献をなしたものの中で、Wordsworth や Tennyson は神の支配する宇宙の栄光を見ることを教え、またそれによって神が人間に示し給うた愛と父権とを読みとらせてくれている。彼等は＜この日光によって光を与え給う父なる神のもと＞まで我々を導いてく

れるし、また＜入口の扉の向うにはどんな特権が横たわっているか＞を知らせてもくれる。

さて、詩人Cowperは、田園生活の描写の到る所で、我々の目を見はらせてくれる。

This glassy stream, that spreading pine,

Those alders shivering to the breeze.

(注2)

Wordsworth は日光と影で覆われた生垣にとびかう小鳥を描いたり、微風にひるがえる水仙が＜ひとり住居いの喜びである胸の内＞にひるがえる姿を描いたりした。Tennyson は3月の黒いとねりこの芽や、＜4月の青空できらめく栗の芽＞や、ルビー色のしなのきから吹き出した何百万という数え切れない程のエメラルドに注目させてくれた。このような詩人は、全て、自然の公開書をひもとくだけで、我々の心にひそむ愚鈍にして無分別な獣性を一掃してくれる。

To turn to the deep sky and from its splendours learn

By stars, by sunsets, by soft clouds that roam

Its blue expanse, or sleep in silvery rest,

That Nature's God has left no place unblest

With founts of beauty for the eye of love.

最大にしてしかも最も希少的価値のある詩人の示した他の一つの強力な機能は、人の心に永遠なるものの意識を深めてくれたことである。

Milton は天の清純性を極めて巧みに人に伝え、「失樂園」と「復樂園」の教訓を我々に与えている。そして我々の想像力をサファイア色の王冠

の前に立たせてくれるのである。

Where the bright seraphim in burning row
Their high up-lifted angel trumpets blow,
And the cherubic host in thousand choirs
Touch their immortal harps of golden wires.

このほか、Dante のような大宗教詩人は罪と正義、悔い改めと来るべき審判等の驚くべき現実の姿を我々の魂の中に焼きつけている。また Shakespeare や Robert Browning はその天分の才の光りを歴史の頁の上に投げ、読む者の心の奥底を輝らしている。彼等は人生のすばらしさとつまらなさを同時に我々に顕示している——それは勝利に喜んでいる時も、試みに会って苦しんでいる時も同様である。かの魅惑的な Olney の詩人はこのような働きの全てを完了するために大きな貢献をしているが、それは彼にある種の特別な才能が備わっていたからである。

I. 家庭環境に愛情を注ぐ詩人

Cowper は日常生活を送るのに、ある意味では以前の文学には知られていないような魅力ある天分を発揮している。彼はそれを純真にして情愛のこもった想像という黄金のもやに浸したのである。どんなにありふれた出来ごとでも、うるわしい想像力の日の下では面白くもなり、また詩的なものにもなった。Cowper は凝視し、夢想する。健康で愛くるしい百姓娘は腕にバスケットを抱えている。荷馬車はガラガラ音を立てて行く。それをひく馬は汗にまみれている。青い小石を磨いている光り輝く泉水。Mrs. Unwin の編み針。半ば目を閉じ、ほほをこわばらせ、あらしに向って歯をむき出してむちをあてる御者。長靴で水をはねとばし、腰を革ひもでとめ、髪を凍らせた郵便配達夫は配達しながら無分別に呼び子を鳴らす陽気のもの——

これら全ては Cowper があずま屋に腰を下ろして物思いにふけり、バラや果樹園を眺めながら作詩するにふさわしい題材を提供してくれた。この状景はどの一つをとってみても、Cowper が瞑想するのに全くふさわしい落ち着いた家庭的なものばかりであった。

Now stir the fire, and close the shutters fast,
Let fall the curtain, wheel the sofa round,
And while the bubbling and loud-hissing urn
Throws up a steamy column, and the cups
That cheer but not inebriate wait on each,
So let us welcome peaceful evening in.

(注3)

Cowper の悲しみと孤独とを慰めてくれるあのよく馴らした野免についての魅惑的な短詩はよく知れ渡っているものであり、また彼の賢いスパニエルのビューが睡連をひき抜いてそれを彼の足もとにもってきた時のあの曲りくねったウーズ河の兩岸に映える状景も同様である。切り倒したポプラの樹とむしり取ったバラの蕾をうたった詩。彼の作品を代表する“The Task”——彼に陽気な気分を思いつかせた——は家庭中の出来ごとく<炉辺の楽しみと家庭の喜び>を余すところなく見事な筆致で描いている。しかもそれは、楽しい靈感の光のもとでは、決して平凡なことではなくなっている。それはつまらないからといって軽蔑されるかも知れないものを出来る限り美しい神聖なものであることに気付かせてくれる。このような詩の主題が、優美な詩にみられる微妙な魅力によって作り出されるためには天来の独創力が必要とされた。立派な行為と考えとを俗化させるようなことはせず、彼は毎日の生活と仕事とを気品のあるものとしている。「彼の描いた絵画は、ラファエルのやさしさの全て

を表現したものであり、またテニアのみせたみがきと鋭さとで仕上げられている」といわれている通りである。例えば、人間同士が日常交際する場合、そのとりあげる会話の話題には、実生活に関することがらかなり多く取りあげられているのであるが、Cowper の場合も、実際に適切で自然な、しかも最も深遠で神聖な話題から決してそれない会話を望む光を投げかけている。だから嘲笑者の反対に対しても、彼がどのように答えているか、容易に想像が出来るのである。

What ? always dreaming over heavenly things,
With angel-heads in stone, with pigeon wings ?
Canting and whining out all day the Word,
And half the night ? fanatic and absurd !

(注4)

これに対して彼は次のように答えている。

Well spoken, advocate of sin and shame,
Known by the bleating, Ignorance the name !
Is sparkling wit the world's exclusive right ?
The fixed fee-simple of the vain and light ?
Can hopes of heaven, bright prospects of an hour
That comes to waft us out of Sorrow's power,
Obscure or quench a faculty that finds
Its happiest soil in the serenest minds ?

(注5)

またCowperには、〈エマオの村にゆく2人の弟子〉の語り合いを次の言葉で結んでいる詩のあることを忘れてはならない。

Now theirs was converse such as it behaves

Man to maintain, and such as God approves.

(注6)

Cowper はまた日常生活における外での出来ごとに関してだけではなく、心の奥底にひそむ愛情をうたに表わす詩人でもあった。彼を愛し、彼に思いやりのあった者に対するひたむきな献身的愛情は彼の顕著な精神的特質であった。彼ほどその友に対して強い感謝の意を表明したものはないだろう。それは、あの極めて自然に、うるわしく書かれた書簡に表われているだけではなくて、 Joseph Hill, Mary Unwin, Newton や彼の晩年をやさしく見守ってくれた従兄の子息である John Johnson に宛てた短信・短詩にも明らかに表われているのである。例の“母の肖像”を受け取ったと同時に書いたあの世界的に有名になった短編詩の中で、彼の声はすすり泣きでとぎれそうになった程、その詩も無限に感傷的なものとなっている。

O that those lips had language ! Life has passed

With me but roughly since I heard thee last.

Those lips are thine – thy own sweet smile I see,

The same that oft in childhood solaced me;

Voice only fails, else how distinct they say,

‘Grieve not, my child, chase all thy fears away !’

(注7)

その母の死によって Cowper が実際に心に受けたものは、母親に対する絶大な敬慕の情と、耐えがたい大きな悲嘆であった。後年、その書き残したのものからも推測されるように、彼はその幼少時代を理想化していると同時に、自分自身に危険を感じた程である。自分自身に対する自信を喪失したばかりでなく、世の中への信頼を裏切られてしまった。自分で

騙されたと思いこんでしまい、その上、使用人たちが、その母の死を本当だと思わせないようにやさしく気を配ってくれたことが、却って彼には欺かれたという気持をますます強く懐かせるようになった。しかし彼はその詩で、自分の感情を現代人の心理を予期するような鋭敏な知性で述べている。

My mother ! when I learned that thou wast dead,
Say, wast thou conscious of the tears I shed ?
Hover'd thy spirit o'er thy sorrowing son,
Wretch even then, life's journey just begun ?
Perhaps thou gav'st me, though unseen, a kiss;
Perhaps a tear, if souls can weep in bliss—
Ah, that maternal smile ! it answers — Yes.

(注8)

彼はこの様に純真な子供心に返って、母親の愛の微笑みのもとにあった時のことを思い出さない日はなかった。

Playing with the vesture's tissued flowers,
The violet, the pink, and jessamine,
I pricked them into paper with a pin . . .

(注9)

そして出来ることなら、彼女を呼び戻せないかと尋ねて、次のように続けた。

I would not trust my heart—that dear delight
Seems so to be desired, perhaps I might —
But no; what here we call our life is such,

**So little to be loved, and thou so much,
That I should ill requite thee, to constrain
Thy unbound spirit into bonds again.**

(注10)

Ⅱ. 予言者詩人

しかし Cowper は家庭の愛情と日常生活の出来ごとだけを書いた詩人であるということで自己満足していると考えてはならない。偉大な詩人であれば共通していえることであるが、彼も時代の予言者であったといえるだろう。彼はその時代の因襲道徳には超然とした態度をとり、しかもその不法行為を敢然と弾劾したのであった。あの成果のない人為的な18世紀を完全に描写した状景は、彼の作品から抜き出そうと思えば容易に出来るのである。それは彼を疑念で包みこみ、そして次のような叫び声をあげさせている。

**O for a lodge in some vast wilderness,
Some boundless contiguity of shade,
Where rumour of oppression and deceit,
Of unsuccessful or successful war,
Might never reach me more ! My ear is pained,
My soul is sick with every day's report
Of wrong and outrage with which earth is fill'd;
There is no flesh in man's obdurate heart —
It does not feel for man.**

(注11)

Cowper はまたその作品 “Tirocinium” (手ほどき) の中で、パブリックスクールが陥ってしまった不道徳、破廉恥の極みを尽くしたあの悲惨な状態

を厳正な筆致で描写している。また<奴隷のかせを固くするために自由という力を用いている恥辱から英国を救った>あの4人の勇敢な聖者のように、彼は奴隷売買の国家的犯罪を何回も弾劾して次のように叫んだ。

Canst thou, and honoured with a Christian name,

But what is woman-born, and feel no shame ?

Trade in the blood of innocence, and plead

Expedience as a warrant for the deed ?

(注12)

彼はまた、繰返して飲酒に対してのろい声をあげているが、それは当時の祖国を破滅と危殆に陥れる最も致命的な原因の一つとなっていたものである。“The Task”の温和な家庭的な状景の真只中で、彼は<貧乏と孤独の原因を弁解し>、同時に富者にはその国と神に対して果すべき義務を勧告している。また議会の責任を追求したり、説教壇越しに不滅の聖句のむちをふりかざしたりしている。栄華をきわめた都市に鏡をかざしてその真相をあばいている。その当時においても、大半の聖職者は臆面もなく不品行、不道德の実像さながらで、彼はその中の一人スマッグ卿と称するものを描いている。

しかも Cowper はあたかも <卒中に悩まされて>いるかのような、また <灰燼に帰した心には火もなく、かすんだ目には光りもなく、中風やみの手には力もない>かのような教会を痛烈に批判する数多くの状景を描くことを決して恐れるようなことはしなかった。この点では多くの修正が Wesley と Whitefield によってなされた。しかも Wilberforce 主教の言葉を借りれば、<英国国教会は、そのふところから神の聖者たちを追放した時、活気が半減したことを、いな、むしろ活気に反対したことを示した>のである。だから、もしも George Whitefield に与えられた運命に関する Cowper の記述を一読するならば、当時の宗教界の悲惨な嗜眠状態はむ

しろ清純なものであったと判断することが出来るかも知れない。

**Leuconomus— (beneath well-sounding Greek
I slur a name a poet must not speak) —
Stood pilloried on Infamy’s high stage,
And bore the pelting scorn of half an age,
The very butt of slander, and the blot
For every dart that malice ever shot;
The man that mentioned him at once dismissed
All mercy from his lips, and sneered and hissed...
The world’s best comfort was, his noon was pass’d,
Die when he might, he must be damned at last.**

(注13)

Cowper に与えられた名称 <予言者>とは、厳密な意味での旧約聖書における詩人とは違ったものである。唯、彼がそれに次ぐだけの真面目さと、洞察力と、清浄な剛胆さをもっていたからであり、同時に彼自身もそれを自認していたので、次のような言葉となったのであろう。

**A terrible sagacity informs;
The poet’s heart— he looks to distant storms;
He hears the thunder ere the tempest lowers.**

(注14)

またCowperは、その祖国を憂い、国民に訴えた“Expostulation”（忠告の詩）——たとえば聖化された怒りの雨にあって、問題を次々と解いてゆく形で書かれたもの——の中で、自分を敢えてイスラエルの予言者の一人にたとえているし、また彼が責めたてている国民をそのものたちが

非難している頑固で、反抗的な民族にたとえている。その上、誰一人として、自分の方が彼等より劣っていることを認めようともせず、謙遜して頭をさげることもしない、それに〈傲慢不遜な者〉を畏怖しようともしない。自分たちの知能をかいかぶり、その洞察力を過大評価している。しかも自分たちを押しつぶしかけている〈重荷〉が諸国家、諸国民まで及ぼうとしていることを知らない。だから予言者 Cowper の願った唯一つのことは国民が、火によって答え給う霊の父である神と直接に交る喜びを得ることであった。このような〈詩人予言者〉Cowper を更によく知るためには、彼の書いた誠実な作品のもっと多くを例示すべきかも知れないが、ここでは彼自身の目的を自分自身で記述したものを引用するだけにとどめることにする。

Me, Poetry (or rather notes that aim
Feebly and faintly at poetic fame)–
Employs, shut out from more important views,
Fast by the banks of the slow-winding Ouse;
Content, if thus sequestered I may raise
A monitor's, though not a poet's praise,
And, while I teach an art too little known,
To close life wisely, may not waste my own.

(注15)

Ⅲ. 信仰詩人

これまでは Cowper が家庭生活の詩人、家庭環境に愛情を注ぐ詩人、自然や日常生活の出来ごとに心の奥底から愛情を示した詩人であると同時に一面では予言者詩人であることを論じてきたのであるが、他面、彼がその国民をより高度の道徳的理想に奮いたたせ、その魂をよびさます靈的な糧を与えようと努力した信仰詩人であったことにもふれなければな

らない。Cowper はあらゆる詩人中で、最も敬虔の念厚く、宗教的な深みのある多くの作品を残した詩人の一人でもある。

Cowper は人を教え導いた教師であり、またその作品は今でも立派な教科書ともいえるものである。彼は多くの人の前に、神とキリストと、聖霊と、聖書と、義務と、純潔と、慈悲と、友情と、自由と、愛国心と、幸福と、神の手作りの自然と、その偉業と——これら全ての最大にして高貴な理想を提示すると同時に、神のたゆまざる摂理と加護の問題とを教示した。不朽の名作 “The Task” をみても、それがいかに正しく聖書に根ざしたものであるかが分る。

God never meant that man should scale the heavens

By strides of human wisdom, in His works,

Though wondrous: He commands us in His Word

To seek Him rather where His mercy shines.

The mind, indeed, enlightened from above,

Views Him in all; ascribes to the grand cause

The grand effect; acknowledges with joy

His manner, and with rapture tastes His style.

(注16)

Cowper の宗教詩集 “Olney Hymns” はその全てが彼の信仰の経験に基づいて作られたものである。その中の一編 “The Happy Change” (注17) はアルバン病院入院中、病氣回復直後、その再生の喜びと感謝を詩に寄せたものであり、また <Far from the world, O Lord, I flee> (注18) は回復後始めて教会の礼拝に出席した喜びを、完璧な程美しい信仰の表明として歌ったものである。一方、彼が遭遇しなければならなかった精神錯乱を知っている者であれば誰でも、あの心をうつ “Temptation” の詩節を感激をもってひもとかないものはないだろう。

Though tempest-tossed, and half a wreck,
My Saviour through the floods I seek;
Let neither winds nor stormy main
Force back my shattered bark again.

(注19)

このほか、Cowper のさんびかの中には、〈その苦悩〉を表明したものが数多くあることは既に紹介した通りである。(注20) それはまた明らかに、彼には、謙遜にして従順な心と、幼児のような信頼心と、純粹な敬虔の念があふれていた証拠でもある。“Olney Hymns”の中で〈The Spirit breathes upon the Word〉(注21)、〈There is a Fountain filled with blood〉(注22)、〈Hark, my soul! it is the Lord〉(注23)、〈Oh! for a closer walk with God〉(注24)、〈God moves in a mysterious way〉(注25)等はいずれも世界中の教会にとっては得がたい貴重な遺産であり、いつの世までも貯えられる珠玉となるものである。その中には何ら新しい神学はない。新しい福音もない。しかし古い福音のみはいつまでも新しいものである。世にある意見は、その潮が満ちる時もあれば、ひく時もあるが、福音の岩は、その潮がどんなに激しく当たっても、ゆり動かされることはないだろう。空に映える虹の色は、色盲患者の考えによって変ることもなければ、薄らぐこともない。真実はゆるぎなく、神のみ旨にかなえば、必ず勝を得るものである。しかも一縷の希望の光こそは、失望の淵に沈みかけている者の心をも輝やかすのである。

Cowper につきまといつた〈失意〉は、体質的なものであると同時に生活環境によるものであり、また過度に敏感な気質によるものであった。彼は敏感で気の弱い子供であった。極端に憶病な性質ではあるが、同時に暖かい思いやりの気持をもっていた。6才で母を亡くしたので、最も強い影響を受けたのは学校からであった。直ぐに学友たちの野蛮な行為のえじきに

されてしまった。Westminster 校の学童であった頃、Margaret 聖堂の墓地の前を通り過ぎようとしていた時、堂もりが墓堀りをしていて、丁度堀り起した頭蓋骨を転がした所、それが彼の足に当たった。それは子供の心に余りに大きなショックを与えた出来事であった。後年、成人してから彼は、「夜も昼も拷問台に恐怖におののきながら横たわり、絶望のうちに起床した」と書き記している。彼のこの病的な感情は遂に発狂にまで高じ、自殺を計るに至った。そして彼は、自分の精神状態を、後になって心に平静をとり戻した時、黒ずんだ池——それは時折、外部からの日光を反射させることもある——の一つにたとえてはいるが、希望のもてない不安の苦悩は絶えずその裏面にあって消えなかった。

Cowper が精神錯乱で前記のアルバン病院に入院中、極めて機宜に適した治療を施した誠実で最も信頼のおける侍医から一冊の聖書が彼に手渡された。そして偶然にも開かれた箇所が、“ローマ人への手紙3章25節”であった。

神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を神は忍耐をもって見のがしておられたが。

Cowper の生涯に光彩を添えたのは、キリストに対するこの純粋な信仰であった。彼の創作した詩の全て、創作力の全て、自然を絶大に愛する心のすべてが、その信仰によるものであった。苦しまぎれに仕事として書かなければならなかったかも知れないが、そとの自然の事物に目を向ける時、「私の父なる神がそれら全てを創り給うた」ということが出来たのもこの信仰があったからである。

さて、Cowper の 68 年にわたる生涯は大きく 2 期に分けることが出来る。それは 34 才迄を前期として、それ以降を後期とするものである。そ

して彼の宗教への関心が高まったのは、その後期においてであった。彼が精神病院に入院したのは34才の終りであった。彼は病院の生活を通してキリストに出会い、その眠れる目を覚されて、知力と肉体の健康を回復することが出来た。病気を契機として、かの〈賢明な俗人〉は知るよしもなかった新生の喜びを見出したことから、その後期が始められたのである。そしてあの不滅の名声を獲得した書簡と詩作が生み出されたのも、その信仰生活が続けられていた後半生においてである。

このキリストへの信仰心、即ち、彼自身の言葉を借りていえば、〈精神病院での回心〉がなかったなら、恐らく、コットン博士の精神病院を立ち去ることはなかったであろう。そこに入院中、幾分快方に向っていた時——勿論休息と、手厚い治療と看護によるものであるが——彼の心の扉を再び強く叩いたのは、聖書のあのラザロの甦りの物語り（注26）であった。彼の心は、この信じられないような奇蹟に一瞬戸惑いはしたが、自分自身の立場と事情にあてはめてみて自分も奇蹟的に死人より甦ることが出来たという確い信仰をとらえることが出来た。この出来事を説明して彼は告白している。「私は救い主のなし給うたことに限りなきいつくしみと、あわれみとを見出したので、この物語りを読んで涙が出る程の喜びと感動を憶えた。イエスが私自身に向けようとされているのが、正真正銘の恵みであったということは信じられない程であった」と。その後間もなくCowperの目は、"ローマ人への手紙3章25節"に注がれた。

神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、

この三度目の聖句からCowperは、はっきりと過去の自分の中に〈新らし

い生命>が鼓動し始めたことに気がついた。そしてそれを彼は次のように表明した。「直ちに私は信ずる力を得ることが出来た。そして<正義の日の光>が私の全身に輝いた。私は神のなし給うた贖罪の大きさを見た。私のゆるしは彼によって保証された。忽ち私は神の福音を信じ、その恩寵に与かった。全能の腕が私にまで及ばなかったら、私は感謝と喜びで死すべきであったと思う」(注27)と。その直後書き始めたのが、
"私は群を離れた傷ついた鹿"であった。

I was a stricken deer, that left the hard long since.

With many an arrow deep infix'd

My panting side was charged, when I withdrew

To seek a tranquil death in distant shades.

There was I found by One who had Himself

Been hurt by the archers. In His side He bore,

And in His hands and feet, the cruel scars.

With gentle force soliciting the darts.

He drew them forth, and healed, and bade me live.

(注28)

結 び

Cowper の精神の苦悩の時期はこのような祝福で終り、また彼自身法廷弁護士としての本業が出来なくなったことも明白になり、その上、社会も、友情も、娯楽も彼には全く魅力のないものとしてその眼前から排除された。そして新らしい感動に心の奥底まで充たされたので、彼はロンドンを立ち去って田園での隠遁生活を始めた。その時の Cowper の偽りのない感情は彼の最も美しいさんびかの一つ "Retirement" の中に鮮やかに描かれている。それはまた彼の信仰の勝利の喜びのうたでもあっ

た。(注29)

Far from the world, O Lord, I flee,
From strife and tumult far;
From scenes where Satan wages still
His most successful war.

The calm retreat, the silent shade,
With prayer and praise agree;
And seem by Thy sweet bounty made
For those who follow Thee.

* * * * *

Author and Guardian of my life,
Sweet Source of light Divine,
And – all harmonious names in one –
My Saviour ! Thou art mine !

What thanks I owe Thee and what love,
A boundless, endless store;
Shall echo through the realms above,
When time shall be no more.

(注30)

注

1. Shakespeare; *Midsummer Night's Dream* V. I. 17.
2. *The Shrubbery*, 第2節の1 . 2行。
3. *The Task*, Book IV, *The Winter Evening*, ll. 36–41.
4. *Conversation*, ll. 575–578.

5. **Ibid., ll. 588–594.**
6. **Ibid., ll. 537–538.**
7. **On the Receipt of My Mother's Picture out of Norfolk,**
ll. 1–6.
8. **Ibid., ll. 21–27.**
9. **Ibid., ll. 75–77.**
10. **Ibid., ll. 82–87.**
11. **The Task, Book II, The Time-piece, ll. 1–9.**
12. **Charity, ll. 180–183.**
13. **Hope, ll. 554–569.**
14. **Table Talk, ll. 494–496.**
15. **Retirement, ll. 801-808.**
16. **The Task, Book V, The Winter Morning Walk, ll. 218–225.**
17. **Olney Hymns; XLVI.**
18. **Ibid., XLVII. Retirement.**
19. **Ibid., XXXVIII. Temptation. の第 5 節。**
20. フェリス女学院大学紀要第 4 号（1969）拙稿：
William Cowper の詩と聖書の隠喩、Ⅲ 及びⅣ 参照。
21. **Olney Hymns; XXX. The Light and Glory of the Word.**
22. **Ibid., XV. Fountain Opened.**
23. **Ibid., XVIII. Lovest Thou Me ?**
24. **Ibid., I. Walking with God.**
25. **Ibid., XXXV. Light Shining out of Darkness.**
26. ヨハネによる福音書第 11 章の 1 節より 43 節。
27. **Andrew James Symington: The Poet of Home Life,**
Centenary Memories of William Cowper (London, 1900),
P. 131.

28. **The Task, Book III, The Garden, II. 108–116.**
29. 注18. の本文参照。
30. **Olney Hymns; Retirement, 第1節、第2節、第5節及び第6節。**